



森羅万象につながる  
祈りの道へ

kumano

# 悟りの高野山 祈りの熊野

黒潮の巨大なエネルギーを受け、日本で有数の多雨と濃密な雲霧、ふりそそぐ陽光に恵まれ発達した熊野の森は、木の国の名にふさわしい。その懐は限りなく深い。そして、逃れ、たどり着いた生きものたちを受け入れ

高野の地で空海が大成させた真言密教は、この世の全ての存在があるがままに見つめよと説く。悟りとは、自分の心があるがままに知ることであり、そこに至るための修行のひとつに、阿字観がある。静かな空間



あるがままを見つめる  
阿字観の世界

koyasan

できた「隠国」だった。その森の計り知れない多様な命の中に、人も、獣や草木、小さな虫も等しく含まれる。それは忽然とそびえる窟に、空を覆う一本の巨木、千古の森、その森からしみ出た清流が飛翔をあげる大滝に、神仏を見る地でもある。熊野古道は、そんな自然に生かされていることを忘れずに暮らしてきた人里と聖地を、境界なく繋いでいる。熊野で森羅万象の根っこを追い求めた学者、南方熊楠が描いた曼陀羅は、蚕のまゆ玉のようだった。見えるものも見えないものも、生も死も、男も女も、あらゆる存在を点と線でぐるぐるとなぐ。私たちの身や心も、八百万の命が循環する小さな点をつないでいることを教えてくれる。いにしえの時代から、人々は生きる指針を求めて熊野に入り、この道歩んだ。そこにはふと足をとめる（ものやこと）がある。今ここに自分がある。奇跡に思わず手を合わせなくなったりもする。人の力ではどうしようもない大きな存在に身をゆだねると、張り詰めていた心が解けて、眠っていたアンテナがゆり起こされる。そしてもつと歩きたくなる、熊野がある。



④那智の滝は、熊野那智大社の別宮・飛瀧神社のご神体として、古くから人々の畏敬を集めてきた。人々の歴史と自然が溶け合う光景だ。  
⑤聖地から聖地へ、険しい山道の古道が結ぶ。それは幾多の世紀を超え、蘇生を願い、折りの旅に出た人々の軌跡だ。  
⑥熊野は八百万の神々の国。道端に転がるこのような玉石にも人々は手を合わせてきた。

で「阿字」の本尊を描いた掛け軸を掲げて集中し、自身と本尊とが一体となった時、悟りが実現する。「阿とは、全宇宙を包括する大日如来を表します」と金剛峯寺の藪邦彦さんは語る。そして、一般的に知られている座禅と阿字観の違いをこう話してくれた。「座禅は煩惱を打ち消して無を目指しますが、阿字観は、煩惱も含め全てを認めるものです。大日如来と二体になる過程で自らを客観視し、あるがままを受け入れる。そうして、よりよく生きる智慧を授かり、さらにその智慧を周囲に還元することを目指します」。大日如来の「如」は、「在るが如く世の中を見る仏の世界」を表す。阿字観を通して、「阿」の二文字、即ち大日如来と二体となることで、宇宙の一部としての自分の存在を体感する。そして、それぞれの命が宇宙と二体であることを悟る。日常を生きながら、己自身のあるがままの姿を見つめなおすことから始まり、最終的には自身の中に仏を見出し、仏と二体となることを目指すこの修法は、空海以来1200年の長きにわたり、変わることなく続けられている。だからこそ、高野山には今も自然や異文化があるがままに受け入れ、より昇華させるという寛容の精神が脈々と息づいているのである。



⑦阿字観のご本尊は梵字の「阿」が書かれた掛け軸。「ア」という首を息に乗せて深い瞑想に入っていく。  
⑧根本大塔は、空海が高野山開創後に建立した真言密教の根本道場。  
⑨高野山真言宗の総本山金剛峯寺。